

## 愛知川の環境改善に係る取組について

市民環境部 森と水政策課

## 1 取組の背景

かつて愛知川は、鮎釣りの解禁日に釣り人が列をなして河原に並ぶなど、鮎の生息地として全国的に知られていました。

しかし、近年では、鮎を死に至らしめる冷水病の全国的な蔓延に加え、愛知川中流域における河川の瀬切れや、長期に渡る水の濁り、砂礫の供給がないことによる河床の変化などにより、鮎の姿が少なくなってきたとされています。

また、河口では、砂礫の供給が無いことによる砂浜の消失（浜崖）でシジミなど二枚貝の生息場所が減少したり、上流域では森林からの土砂の流出によって河床が上昇しイワナなど溪流魚の生息環境が悪化したりするなど、愛知川は上流から河口に至るまで、河川環境に大きな変化が起こってきています。

一級河川である愛知川は、滋賀県の所管であることから、本市が直接愛知川の環境改善に関する施策を行うことはできません。しかし、愛知川は、鈴鹿から琵琶湖までの森里川湖をつなぐ本市の重要な財産です。愛知川という広大な自然環境の改善は、一朝一夕にできるものではありませんが、まずはできるところから始めようと、平成27年度の当課創設以来、様々な取組を行ってきました。

## 2 取組の経過

## (1) 平成27年度

## ① つながりシリーズ「鈴鹿川から琵琶湖まで」

- ・「鈴鹿川から琵琶湖までを有する本市の自然はすべてつながっている」ことを、多くの市民に気づいていただくために、誰でも参加できる勉強会として「つながりシリーズ 鈴鹿川から琵琶湖まで」を実施しました。全4回、計約150人の参加がありました。

回数	テーマ	話題提供	参加者数
第1回	愛知川の今を知る	田中進 (愛知川清流会)	32人

第2回	子孫に伝えたい愛知川	大西和彦 (湖東信用金庫 会長)	31人
第3回	鈴鹿の山と暮らし	筒井正 (茨川集落最後の住人)	60人
第4回	川・湖に育まれた食文化	藤岡康弘 (びわ湖の森の生き物研究会)	25人

## (2) 平成28年度

### ①エコツアー「子どもたちに伝えたい かわのたのしさ」

- ・本市の自然資源を持続的に保全していくためにエコツアーが有効であるとの認識のもとに、東近江市エコツーリズム推進協議会が発足したことを受け、エコツアー実施の第一弾として、「子どもたちに伝えたい かわのたのしさ」を愛知川中流と上流の2回に分けて実施しました。
- ・エコツアーは単なるイベントではなく、募集定員を少なく(15組)中身を濃くすることで、自然の価値を認識してもらうことをねらいとしていますが、同時に、地域の方にも地域の自然の良さを再発見・再認識してもらおうというねらいもありました。
- ・このため、中流ではアユをメインに愛知川漁業協同組合に、上流ではイワナ・アマゴをメインに愛知川上流漁業組合に、それぞれイベントの実施サイドとして関わってもらいました。

実施日	実施場所	地元団体の関わり	参加者数
7/17(日)	中流(渋川)	愛知川漁業協同組合	11組(29人)
7/22(金)	上流(神崎川)	愛知川上流漁業組合	7組(18人)

### ②ビワマス産卵状況調査

- ・サケの仲間であり琵琶湖の固有種であるビワマスが、秋の産卵期を迎えると愛知川に遡上し、産卵することは、あまり知られていません。このため、地元の関係者等で実際に産卵状況を確認することを目的に、専門家の指導を受けて調査を行いました。

11/3 事前調査	専門家と当課職員で愛知川下流から中流にかけて調査したところ、下流では産卵床が確認できなかったことから、青山頭首工付近と、渋川付近の2ヵ所で調査を行うことを決定。
11/9	地元漁協や永源寺ダム管理事務所職員など12名が参加し、

調査	専門家からビワマスや産卵床のレクチャーを受けた後、調査を行ったところ、9カ所で産卵床を確認。
----	--

- ・川で産卵され、孵化したビワマスの稚魚は、5～7cmまでに育った5～6月頃に、雨を待って琵琶湖に下ります。琵琶湖の深いところで、早くても翌年の初夏まで暮らしますが、2年目、3年目、さらには4～5年と琵琶湖で暮らすビワマスもいて、4～5年目ともなれば50cm以上（最大70cm）にまで成長するビワマスもいます。
- ・調査当日も、大きなビワマスの姿を確認しましたが、産卵をしたビワマスは、そこで命を終わらせます。愛知川河口から25km以上も遡上し、産卵し、死んでいく様は、たいへんドラマチックなものでした。

### (3) 平成29年度

- ・溪流をガイドするプロのガイディングを体験するために、長野県でプロのガイドツアーを体験しました（奥永源寺地区から2名が参加）。

### (4) 平成30年度

#### ①市民とのワークショップ

- ・平成30年度より、滋賀県琵琶湖環境部環境政策課と滋賀県琵琶湖環境科学研究センター及び当課が連携した事業をスタートさせました。
- ・これまでは、市単独でできることに限りがありましたが、県および研究機関と連携したことで、実施できる事業内容を広げられました。
- ・まずは、望ましい愛知川の姿を浮き彫りにするとともに、市民にもその望ましい姿を思い描いていただくことを目的として、親しみやすい「魚」に着目したワークショップを2回実施しました。

「魚のにぎわいを回復させるための愛知川での川づくりを考える」

実施日	テーマ	概要	参加者数
10/30（火）	愛知川で釣りや遊んだ思い出を聞かせて	かつて愛知川が豊かだった頃の様子を具体的に知るために、釣りや遊びの中で覚えている愛知川の様子を聴き取るワークショップ	26人
12/7（金）	釣りや遊んでい	前回の発展版として、かつて	24人

	た時の愛知川の 様子を聞かせて	の川の様子を、流れの速さや 川底の感触などを頼りに具体的 に聴き取るワークショップ	
--	--------------------	---	--

(5) 令和元年度

①湖岸から上流までの観察会の実施

- ・昨年度に引き続き、滋賀県琵琶湖環境部環境政策課、滋賀県琵琶湖環境科学研究センターと当課が連携した事業を進展させるため、今年度はフィールドに出たの事業を行っています。
- ・愛知川の河口（栗見出在家町）、下流（阿弥陀堂町）、上流（箕川町）で、それぞれに異なる問題意識を持ちながら、現場での観察会を実施しているところです。

実施日	実施場所	概要
7/26（金）	栗見出在家町の湖岸	かつて多かったという二枚貝、特にシジミの現在の生育状況を観察する
9/5（木）	箕川町の御池川	上流域の代表種であるイワナが生育する環境について、河床の状況や周囲の森林の状況を観察する
9/26（金）	阿弥陀堂町の愛知川	アユの産卵シーズンに合わせて、アユの産卵床として使われやすい河床の環境について観察する

- ・上記観察会終了後には、愛知川の自然再生について身近な視点からできることを考えるための次の講演会を開催する予定です。

■できることからはじめよう 愛知川の自然再生

10月30日（水）13：30～16：00

「水辺の小さな自然再生」滋賀県立大学 准教授 瀧健太郎氏

五個荘コミュニティセンター2F 大会議室、定員 50 名、無料

②愛知川内水面漁業振興協議会の設置

- ・「内水面漁業の振興に関する法律」に基づいて、愛知川漁業協同組合からの申し出により、「内水面漁業振興協議会」が設置され、8月30日に第1回協議会が開催されました。事務局は、滋賀県農政水産部水産課及び土木交通部流域政策局です。

- ・本市からは、当課課長及び農業水産課長が委員として参加しています。
- ・愛知川漁協が協議会の設置を求めた趣旨は次の4点です。
  - ア 愛知川に濁り水が出てくるのはある程度仕方がないことだが、長期間にわたって続くことで、河床に悪影響が出て、鮎に適さない川になってきている。
  - イ 鮎が上ってくる時に、瀬切れが起きやすく、非常に不安定な河川環境である。
  - ウ 永源寺ダムの建設後、下流への川石や川砂の供給が止まり、河床が著しく低下した。これにより、水の浄化能力も低下した。
  - エ 川と人とのつながりが失われてきた。
- ・同協議会は、今年度中に3回、次年度以降も年3回程度開催される予定です。

### 3 今後の見通し

平成27年度からは、まず人と川をつなかりを少しでも取り戻そうと、勉強会やエコツアーを通じて、川に関心を持ってもらうことに注力してきました。それらの取組をしてきたことが、各方面との連携を生み出し、平成30年度からは、県や研究機関と共に事業を進めることができるようになってきました。

愛知川の環境改善は、国や県レベルでないとできないこともありますが、市民への情報発信や市民団体とのつながりを活かした取組などは、市が得意とするところではあります。それぞれが連携し、できることを進めていくことで、少しずつではありますが、今後も愛知川の環境改善に取り組んでいきたいと考えています。

また、地元漁協からの要望により設置された愛知川内水面漁業振興協議会においては、多様な関係機関や専門家が協議を行うことができる場であることから、本市も委員としてできる限りの提案をしていきたいと考えています。